

河崎なつ

—近代日本の女子教育—

女性解放運動の指導者—



白梅学園高等学校教頭 上木 光夫

河崎なつは、明治・大正・昭和の三代を、女性が人間としてめざめ独立する道を追求めて生き抜いた、近代日本を代表する女子教育・女性解放運動の指導者である。終生教育界で活躍する一方、女性運動家として足跡を印し、人生の集大成といえる時期に白梅学園短期大学に迎えられ、「保育の白梅」のいしずえを築いた。

川崎は生涯を通じて、明治以来の権威主義的な教育の矛盾にさらされる子どもたち、封建的な家父長制のもとで差別に耐える女性たち、資本主義経済の底辺で苦しむ生活困

窮者たちに寄り添い擁護する視点を堅持した。こうした「下からの視点」に支えられた彼女の活動と交友は広く、深く、その足跡をたどる時、近代日本の民主化を目指す運動の重要な系譜が浮かび上がってくる。ここでは主として林光著『母親がかわれば社会がかわる—河崎なつ伝』（草土文化、一九七四年）と『白梅学園短期大学創立二十五周年記念誌』（一九八二年）に収録されている河崎の自伝的な述懐と関係者の証言によりながら、彼女の歩んだ道の一端に触れると共に、白梅学園における彼女の教師像を想いう

かべてみたい。

戦前の略歴と河崎なつをめぐる人々

河崎なつは、一八八九(明治二二)年、奈良県五條町で時計商河崎常三郎とさとの長女として生まれた。家父長的な古い家に育ったこと、幼年期に母の死によって里子に出されたことなどが原体験となった。一九〇五(明治三十八)年、奈良女子師範学校を卒業、五條尋常小学校の教師となる。三年後の一九〇八年、東京女子高等師範学校に入学、保守的な師範教育に疑念を抱きつつ、退学処分になった学生の救済運動を率先したり、雑誌『青鞥』の読者となり与謝野晶子に傾倒した。

一九一二年、明治から大正に改元された年、河崎は女高師を卒業、北海道小樽高女の教師となる。「時代閉塞の現状」に「宣戦」した石川啄木に共鳴。啄木の詩や小説、さらに新聞記事を教材とし、自由選題の作文や生活記録の指導を通して、生徒たちに社会の実際を見つめさせ、問題の解決に参加する生き方をつかませようとした。

小樽高女在職中に勃発した第一次世界大戦のただなか、一九一六(大正五)年、彼女は再び東京女高師研究科に戻り作文心理学を研究、そのかたわら東京帝大哲学科に通い実験心理学を聴講したり、貧民街の子どもや生活困窮者の実

態を見て歩いた。

この頃から与謝野晶子との交流が始まる。二人の信頼関係は深かった。生活に困窮する与謝野に対し、河崎は『明星』の発行経費を陰ながら援助していた事実にも注目していた。この時期、河崎は与謝野を介して森鷗外、芥川龍之介、有島武郎、堺枯川(利彦)、大杉栄ら著名な文学者、運動家とも接点を持ち、人生や社会への認識を深めていった。

米騒動が日本中を揺るがせた一九一八年、東京女子大が創設され、河崎は国語(作文)の教授となる。また一九二〇年には新婦人協会が結成され、与謝野の紹介でこれに参加、平塚らいてう、市川房枝らと知り合う。そして当時の画一的な公教育に疑念を抱いた芸術家、西村伊作が長女アヤのため、自由と個性を理想とする学校を創ろうとした時、これに共鳴、与謝野寛、晶子夫妻、画家の石井柏亭らと共にその構想、設立準備に協力した。文化学院と名付けられたその私立学校は一九二一年に開校、河崎もその教師となった。前後して成城学園、自由学園、明星学園、児童の村など多くの私立新学校(その多くは「学校」と名乗らず「学園」「学院」と称した)が誕生したが、文化学院は文部省令によらない各種学校としての認可、男女共学の採用、芸術教育の重視、教授陣も前述の人物のほか山田耕筰、有島生馬、高浜虚子ら著名な文化人が名を連ねた点で異色で

あった。河崎は主任を長く務め、一九四一（昭和一六）年まで学院の歴史を担った。暖かい愛情をもって生徒一人ひとりを慈しむ教育を実践したが故に「学院のおかあさん」と呼ばれ敬愛された。

河崎は文化学院在職中、ロシア飢饉救済運動、公娼廃止運動、婦人参政権獲得運動などで中心的な役割を演じたほか、新興教育運動、無産者託児所運動、生活学校運動などにも協力した。彼女が共感を寄せ、支援を惜しまなかったこれらの運動は、いづれも婦人、子ども、労働者といった、社会において人権の損なわれやすい立場の人々に向けられたものだった。またこの時期に公刊された彼女の主著『職業婦人を志す人のために』（一九三二年）、『新女性読本』（一九三三年）、『明日に生きる女性』（一九三四年）の三著は、婦人が職業を持つて経済的にも精神的にも独立して生きる道を説いたものだった。

河崎はこうした運動に先頭を切って関与する一方、池田種生、宮本百合子、戸塚廉、平田のぶら著名な運動家、教育者をはじめ、地下運動に携わる名もなき人々を援助し続けた。例えば戦前の教育運動に重要な役割を果たし、戦後の民主教育にとって貴重な遺産となった雑誌『生活学校』運動を主宰した戸塚廉は、当時を回想して次のように述べている。「この大きな運動のおかげで、うまい牛肉を食わせ

てはげましてくれたり、運動について独創的な示唆を与えてくれたり、ときには小遣いをくれたり、まったく母親のように見守ってくれたのが、河崎先生だったんです。」なお河崎が『生活学校』一九三七年四月号に発表した「女性より男性への希望」と題する論考は、戦前における男女同権社会への先駆的な呼びかけとして注目される。また保育運動史に足跡を残した平田のぶ（児童の村元教師）が創設した子供の村の支援者に名を連ねたことも、河崎の交流の広さを物語っている。

河崎は文化学院在職中も東京女子大、津田英学塾の教授を兼任したが、学生運動に対して常に学生を理解し擁護する姿勢を崩さなかった。後にそれが原因で両大学を去ることになったという。なおこの津田英学塾時代、河崎は作文教授として樋口愛子を担当した。樋口は戦後、白梅学園短大主幹（後に学長）となり、同学園に河崎を招いた人物である。

一九四一（昭和一六）年、太平洋戦争開始の年、日本が戦時色一色に塗りつぶされていく中で、文化学院の存立をめぐる騒動が起き、河崎は学院を去った。その翌年、深い友情で結ばれた与謝野晶子が死亡した。河崎はその枕元で、「奥さん、私はあなたの遺志をついで必ずやります」と語りかけたという。大正デモクラシーの風潮の中、人間性の

尊重を情熱的に説いた与謝野の女性論・教育論の精神は、河崎に受け継がれ、心の底に灯った火のような意志として、国家総動員体制が強化されても消されることはなかった。

戦後の略歴と白梅学園への参加

戦後、河崎は再び全国を活躍の舞台とする。一九四六年、民法改正のための司法制度審議会委員として家族制度廃止に貢献。翌年、第一回参議院議員選挙に全国区で当選（事務局長は池田種生）。任期の六年間、厚生委員として母子の問題に集中して取り組む。一九五二年、長田新（ベスタロッチ研究者、『原爆の子』の編纂者）を会長として「日本子どもを守る会」が結成されると、河崎は保育関係、母子関係の権威として参加を要請され、常任幹事となる。一九五五年には、第一回日本母親大会事務局長、第一回原水爆禁止日本協議会議長、日中友好協会理事・副会長、世界平和大会における日本平和委員会代表、世界母親大会日本代表団長などを務め、女性運動や平和運動に新時代を切り開いた。こうした彼女の功績は前述したような戦前、戦中の活躍を持つ活動の前史に裏付けられていた。

一九五七年、六十八歳となり、これら第一線の運動から距離を置くようになった河崎に、教師としての最後の舞台が与えられた。津田英学塾の教え子の樋口愛子を主幹とす

る白梅学園短期大学から招聘されたのである。白梅学園の前身となる東京家庭学園は、樋口の父、小松謙助が一九二五（大正十四）年に創立した財団法人社会教育協会を母体とし、戦時下の一九四二年に創設された。

社会教育協会が創設された当時の日本では、国際的な新教育運動に呼応して、最上の教師は母であり最上の学校は家庭であると説いたペスタロッチの思想が広がり、民間教育レベルでは母性が教育の原理として謳われた（ペスタロッチ没後百年に当たる一九二七年前後がペスタロッチ主義の高揚のピークであった）。同協会は当時としては新しい「社会教育」という独自の立場から家庭教育を重視、その未来を担う青年女子の教養教育を方向づけるため東京家庭学園の創設を計画した。自由な構想を実現すべくあえて文部省令によらない各種学校として認可を受けたところにも、設立の時期こそ違え、前述した文化学院と同じく大正デモクラシーの潮流に根を下ろしていることが知られよう。

同学園は戦争末期の一時閉鎖を経て戦後に復興、白梅保母学園、さらに白梅学園保育科への名称変更後、一九五七年、白梅学園短期大学保育科として発足した。建学の理念は、その前史を反映して、人間を愛し、人間の価値の最高度の実現を目指すことであった。なお河崎は樋口の両親、小松夫妻とも親交があり社会教育協会の評議員を務めても

いた。河崎の歩みと興味深く交錯し、重なり合うような歴史を有する白梅学園に招かれ、最後の教育実践の舞台を持ち得たことは、河崎にとっても感慨深いことであったと推察される。

白梅学園短大では設立と同時に独自のゼミナールを開設した。それは一・二年生を合併し、教員の指導を受けた上級生の研究テーマに下級生を組み込んで、年々研究を積み上げる利点を有するものだった。指導教員は河崎のほか石山脩平、田中寛一ら学界その他に著名なメンバーであった。河崎は「児童福祉ゼミナール」を担当。「スラム街の子ども」をテーマに絞るが、そこにはまさに河崎の来歴が反映している。河崎は高齢にもかかわらず自ら学生の先頭に立って実地調査を進めた。その過程でスラム街の子どもと他の地域の子どもの作文を比較し、前者の文章には「僕」や「私」という一人称が著しく少ないことが判明、討論の結果、「環境の影響による自我意識の発達のおくれ」という推論を導いた。このテーマは年々引き継がれ、学生に広い社会的視野と深い問題意識を養わせていった。

河崎は一通りでない熱意で学生指導にあたり、一九六二年から六六年までの四年間、保育科長として学園運営にも尽力、人生の終末が近づき体調が不良となっても教壇に立ち続けた。河崎のそばにいて実務を支え続け、保育科長の

任を受け継いだ田中未來は、学生に対する河崎の温情主義ともいえる優しさを次のように回想する。「学科試験でどうしても落とさなくてはならないような者でも、『この子は面接でとてもいい子だった。遠くの田舎から出てきたんだから、勉強は少しぐらいできないだろうが、ほったまっつ赤にしてやりたいっていうんだから感心じゃないか、落としたらかわいそうだ』っておっしゃって、先生のお部屋に行った者は、みんな一所懸命弁護なさるんです。」このように河崎は、自らに真つすぐに向かってくる人間を全身で受け止めて振り払えない、深い人間愛を有していた。それゆえに、学生はもとより教職員からも絶大な信頼を得ていた。

河崎なつの生涯

河崎は、近代日本の女性差別や教育の矛盾を体験、直視する中で、歴史の流れの底流にあつて苦難に耐える人々につきこそ共感を示し、その人々と共に歩むみちのりで、「人間としてめざめ、独立する婦人をめざし、社会の實際にふれて問題の解決に参加する」という実践理念をつくりあげていった。

一九六六（昭和四二）年八月、第十二回日本母親大会に河崎は生涯の最後を賭けた。壇上での彼女の挨拶は、全国

の母親に向かつて呼びかけられた「母親がかわれば社会がかわる」という絶唱であった。同年十一月十六日、河崎は七七歳の生涯を閉じた。十二月一日、東京青山葬場で、関係した学校と日本母親大会連絡会による河崎の合同葬が盛大に行われた。白梅学園短期大学からは学生も参列し、合唱を捧げた。

現在、白梅学園理事長室の隣にある法人応接室は、しばしば重要な会議にも利用されるが、そこには学園の行く末を見守るかのよう、小松謙助・樋口愛子の肖像（写真）と、河崎なつの辞世ともいえる晩年の句を記した二枚の色紙が掛けられている。二枚の色紙には、いずれも「なつ女の署名があり、一枚には「山茶花のはな晴ればれと百舌鳥しきり」、もう一枚には「霜枯れの庭にひとりやひなたぼこ」と、なすべきことを全てなしとげた晩年の彼女の穏やかな、しかしどこことなく寂しげな心境が詠み込まれている。管見の限り、この色紙は、彼女が生涯の最後を賭けた母親大会の財政の一助になればと、病に伏しがちになった晩年に詠んだ句を、自ら色紙に書き写し、関係機関・関係者に配ったものの一つである。

（敬称略）

【参考・引用文献】

- 林光『母親がかわれば社会がかわる―河崎なつ伝』草土文化（1974年）
※冒頭の河崎なつの写真はここから転載させていただきました。
『白梅学園短期大学創立二十五周年記念誌』（1982年）
文化学院史編纂室『愛と叛逆―文化学院の五十年』同学院出版局（1971年）
民間教育史料研究会『民間教育史研究事典』評論社（1975年）
生活学校復刻刊行会『生活学校』第五巻、日本読書刊行会（1983年）